

立教大学学術推進特別重点資金 (立教 S F R)

個人研究

2018年度研究成果報告書

研究代表者	所属部局・職	氏名
	文学部・准教授	阿部 善彦 印
研究課題	14世紀キリスト教思想史における神化思想の受容と展開 —エックハルトからゾイゼへ—	
研究期間	2018年度	
研究経費 (1円単位)	(支出金額) 325000円 / (採択金額) 325000円	
<p>研究の概要 (200~300字で記入、図・グラフは使用しないこと)</p> <p>本研究は神化思想 (Theosis) を中心にした 14 世紀のキリスト教思想史の根本動向を解明する。そのために、特に、神化思想の受容と展開に関して、同時期及び続く時代に大きな思想的影響を与えた 14 世紀のマイスター・エックハルトと、その弟子ハインリッヒ・ゾイゼの神化思想を研究対象とする。神化思想とは、人間が神的生命を生きる者となるという、キリスト教信仰の根幹をなす神学思想である。本研究では、初代教会から受け継がれた神化思想の受容と、その展開を中心に、14 世紀キリスト教思想史の根本動向を解明する。(237 文字)</p>		

<p>キーワード (研究内容をよく表しているものを 3 項目以内で記入。)</p> <p>[神化思想] [ドイツ神秘思想] [誕生論]</p>

研究成果の概要 (図・グラフ等は使用しないこと。)

本研究は 14 世紀の神学者マイスター・エックハルトと、その弟子ハインリッヒ・ゾイゼの神化思想を取り上げるが、先に述べたように「神化思想」そのものへの学問的関心が高まったのは比較的最近のことであり、特に西方キリスト教思想に関して言えば、それを「神化思想」の観点から主題化する研究の蓄積は十分ではなく、14 世紀のエックハルトおよびゾイゼについても同様である。そのため、研究の大前提として、エックハルト、ゾイゼそれぞれの「神化思想」がどのようなものであるのか、テキストに基づく検討が必要となる。そのために先述の通り (一) から (五) の順序で研究を進めた。

(一) エックハルトの神化思想である「魂における神の誕生」思想の、教父的伝統との連続性の解明。

エックハルトの神化思想は「魂における神の誕生」というかたちで、ラテン語の神学的論考やドイツ語の説教で説かれている。エックハルトはこの「誕生」思想を 4 世紀の教父オリゲネスから継承している。このことをラテン語およびドイツ語著作にもとづいて確認した。

そのうえで、エックハルトが「誕生」を通じて、人間が神の生命において新たな誕生を受けることを、人間が、キリストとの一致において子として父から生み出され、生まれるという誕生のダイナミズムの連関に入ることとして理解していることを確認した。

(二) 「誕生」を通じて実現される「神化」の内容の受肉論、三位一体論、キリスト論との関係性の解明。

誕生がキリストと同じように父から子として生まれることであるとすれば、そこには、人間とキリストとの関係性、また、人間がいかにして、父と子の関係性に入るのかという、神学的問題が関わってくる。これに対して、エックハルトは、まず、受肉論にもとづいて、子が人間となることにおいて人間が同じく子となる救済がもたらされたとする、伝統的な「驚くべき交換」の受肉・神化理解の上に、「誕生」論を展開していることを確認した。

また、この「誕生」が、三位一体である父と子における「誕生」と同じであるとして、三位一体論の誕生におけるペルソナ・関係性を、誕生における神と人間のペルソナ性・関係性の原型に位置づけていることを確認するとともに、その可能根拠として、カルケドン信条等に示される、教父以来の伝統的な、人性と神性の関係に関するキリスト論が適用されていることをあわせて確認した。

(三) エックハルトの神化思想の弟子のハインリッヒ・ゾイゼにおける受容状況の解明。

エックハルトの神化思想は上記のような神学伝統を踏まえたものであるにもかかわらず、同時代に教会当局から異端的と判断されたため、ゾイゼの神化思想は、エックハルトの神化思想の正統性の神学的弁明から出発している。そのためゾイゼによるエックハルト弁明の小著『真理の書』を中心に、ゾイゼのエックハルトの神化思想受容を解明した。

(四) エックハルトとゾイゼの神化思想の相違点の解明。

ゾイゼの神化思想の特徴として、エックハルトの「誕生」論を踏まえつつも、より全面的には、受難神秘思想的性格の強い「十字架」中心の神化思想の展開があることを確認しつつ、その中で、キリストの受難の生涯に倣い従う実践面の強調、アスケーシス・修行論の強調が見られることを、ゾイゼの自伝的著作『ゾイゼの生涯』を中心に検討した。

(五) 神化思想の実践面の強調の傾向について (14 世紀のキリスト教思想史の根本動向の解明に向けて)

ゾイゼにおける「十字架のイエスとの一致」を目指す個人のアスケーシス・修行論の強調が、エックハルトにも見られるアスケーシス・修行論とどのように異なるのか、比較検討した。そのうえで、ゾイゼ以降 (14-16 世紀: 宗教改革直前頃まで) に広く読まれたキリスト教著作家 (特にここではフランドル神秘思想を取り上げる) にも、アスケーシス・修行論を強調した神化思想の展開があることを、いくつかのテキストにもとづいて確認した。

(一)、(二) に関しては、具体的には、エックハルトの『ヨハネ福音書註解』などの重要箇所を検討した。ここでは「神から生まれたものは神であり、神の子である」と述べられるが、この言葉は次の聖句の解釈として述べられている。生まれたものは「血によってでもなく、肉の意志によってでもなく、人の意志によってでもなく、神から生まれた者たちである qui non ex sanguinibus neque ex voluntate carnis neque ex voluntate viri, sed ex deo nati sunt」(ヨハ一・一三)。「肉から生まれた者は肉であり、霊から生まれた者は霊である natum est ex carne, caro est; et quod natum est ex spiritu, spiritus est」(ヨハ三・六)。エックハルトの説く「魂における神の誕生」とは、このように聖書に記された救済の約束の実現にほかならない。つまり、受肉して人間となったイエス・キリストによって人間にもたらされた救済の恵みに与ることであり、それがすなわち、神から生まれた者として神の子となる恵み与ること、神化である。この点については、エックハルトの「ドイツ語説教二」にも重要な思想展開があることが確認された。エックハルトはそこで「処女 juncvrouwe」について語る。

研究成果の概要 (つづき)

「処女」とはイエスとの「等しさ」を意味し「処女」である人は「イエスがとられなく自由[*ledic und vri*]であり、彼自身において純潔であるのと同じように、最も高い真理に対していかなる妨げもなく純粋にとどまるのである」とされる。そのようにしてイエスと「等しい *gleich*」あり方を実現するとき、イエスとの「一致 *einunge*」も実現する。このイエスとの等しさによる一致を、エックハルトは、「処女」が「純潔なイエスを身籠る *den megetlichen Jësum enpfähen*」こととして説く。なぜならば一致は受肉によって「われわれのうちに住まいした」(ヨハ一・一四) 神の言であるイエス自身が、個々の人間人格のうちに内在・内住することによって実現するのであり、それはイエスを「身籠る *enpfähen*」ことに他ならないと理解されるからである。ここでエックハルトは「身籠る *enpfähen*」という言葉を使う。ここに聖母マリアの処女懐胎というキリスト教における決定的な救済史的出来事が念頭に置かれている。しかし「処女」として身籠るのはマリアだけではない。すべての人間人格の魂がマリアと同じように身籠り、それによって、マリアと同じようなイエスとの一致、そして、そこからあふれる救済の恵みに与るのである。「身籠る *enpfähen*」とは永遠なる神の言であるイエスをそれこそが神の子が受肉し、人間本性 *humana natura* をとった救済史的意義の実現として理解されていることを確認した。また同じく「ドイツ語説教二」では「根底 *grund*」によって誕生のダイナミズムが理解されていた。「この根底は、まさしく父なる神がその永遠の言をそこから生み出している根底であり、まさにこの根底から、彼女[処女]も実り豊かに父とともに生み出す者 *vruchtbaere mitgebernde* である」と述べられており、魂の最内奥においてはたらくものは神以外の何ものでもなく、そのはたらきは神がまさにそれによって神自身であるところの父が子を生み子が父から生まれる誕生のダイナミズムにほかならず、魂がこの誕生のダイナミズムに対するかわり、神無しでは完全に無であると理解されていることが確認された。そのためイエスが語る「わたしと父は一である *ego et pater unum sumus*」(ヨハ一〇・三〇)は、エックハルトによればこの「わたし *ego*」は父子の誕生のダイナミズムにおける子の「わたし *ego*」の純粋な自覚を言い表しているのであり、「一 *unum*」は父子の誕生のダイナミズムにおいてのみ成立可能な「一」を言い表しているとされていることを確認した。また、この「一」は、キリスト教において正当に神に語りうる一性であり、受肉の恩寵は、まさに、父と子が一であるというこの「一」へとわれわれを与らせゆくものであり、エックハルトがこれを聖書的・教父的伝統を踏まえて「婚姻」における一致として理解し、受肉を、婚姻を通じて子とともに三位一体の父なる神を父として新たに生まれる新生の恵みとして理解していることを確認した。その際、教父的伝統を踏まえた婚姻的聖書解釈によって、受肉の救済史的意義の究極的実現が人間の神化・神の子であること *theosis/filiatio* という完成であり、また、そこには神の言の自己無化 *kenosis* という自己譲与的な神の愛の満ち溢れた遡りがあると理解されていることを、ラテン語、ドイツ語両著作で確認した。

(三)、(四)、(五)については、ゾイゼの特徴とされる「受難神秘思想 *Passionsmystik*」「十字架神秘思想 *Kreuzesmystik*」と呼ばれる「受難 *liden*」中心的思想と、エックハルトの中心的思想とされる魂における神の誕生の連関を中心に検討した。ゾイゼにおいて「受難」が人間の宗教的生の完成に不可欠であり、キリストの受難に倣うことが完徳の道であることを確認したが、その際、「受難」の根幹には、キリストのみならず、聖母マリアにおいて実現した遡りの心が強調されていることを確認し、それがゾイゼの中心思想である *gelazenheit* の理解にも深くかかわっていることを確認した。*gelazenheit* は「放念/見捨てられること/委ね切ること」を同時に意味しており次のようにも語られる。「最高の放念は見捨てられた状態のうちに委ね切ることである *Ein gelazenheit ob aller gelazenheit ist gelazen sin in gelazenheit*」。こうした *gelazenheit* は「受難」の中で実現するものであるため、「受難」は罰ではなく選ばれた神の友に対する神の愛の印として理解される。「受難」において愛を神と自己と他者に向かって身をもって生きることによって、キリストの十字架に倣う生き方が可能となる。しかし、「受難」が自らを与える愛であることはキリストの受難・十字架そのものによって決定的に示されているが、その「受難」を徹底的に身に受けつつ最高の *gelazenheit* の中で愛をこめて生きたのが、まさに最愛の息子の受難に立ち会って打ち砕かれた聖母マリアである。であるからこそ聖母マリアがゾイゼの「受難神秘思想」においてキリストに次ぐ模範となる。「マリアは、死の苦しみにあるあなたを見つめ、マリアの心と魂は、あなたとともに、悲嘆と苦しみのうちに幾度となく死に絶えたのです」とも述べられており、十字架の悲惨・苦難との「等しさ *glicheit*」に向かってキリストの *gelazenheit* に倣い従うことは、キリストとともに徹底的に死に、そして復活することであり「人が最高の段階に達しようと思えば、その人のうちにある復活のために死なねばなりません」とも述べられる。この死と復活に十字架のキリストによって同時に与ることが「誕生 *geburt*」という「一つの働き」に「無」となって身を委ね「神が自らの根底となるほど完全に神と一体」となったシュネルギアの道を開く。こうして、ゾイゼでは、神化の本質は、受肉のロゴスの懐胎の場面ではなく、対極的なゴルゴタの十字架の死の場面としたキリストの自己無化の *gelazenheit* を通じて理解されることが分かった。

※ この(様式 2)に記入の、成果の公表を見合わせる必要がある場合は、その理由及び差し控え期間等を記入した調書(A 4 縦型横書き 1 枚・自由様式)を添付すること。

研究発表 (研究によって得られた研究経過・成果を発表した①～④について、該当するものを記入してください。該当するものが多い場合は主要なものを抜粋してください。)

- ①雑誌論文 (著者名、論文標題、雑誌名、巻号、発行年、ページ)
- ②図書 (著者名、出版社、書名、発行年、総ページ数)
- ③シンポジウム・公開講演会等の開催 (会名、開催日、開催場所)
- ④その他 (学会発表、研究報告書の印刷等)

③シンポジウム・公開講演会等の開催 (会名、開催日、開催場所)

1

「魂における神の誕生における父と子の関係性について」

(CISMOR ワークショップ「マイスター・エックハルトにおける形而上学と神秘主義」

2018年11月24日 同志社大学一神教学際研究センター (CISMOR))

2

「人間の尊厳について考える」

(シンポジウム《生命の倫理と宗教的靈性》 2018年11月10日 Sophia Open Research Week 講演会 / シンポジウム)

3

Unnamed Women and Meister Eckhart: Female Gender Role in the Late Medieval Spirituality

(Women in Christianity: Okayama University 2018年10月30日)

4

「ゾイゼの受難神秘思想における「十字架」の神化思想」

(東方キリスト教学会、シンポジウム「シンポジウム 受肉と神化をめぐって—自らの問題として問い披く—」 2018年8月30日)

5

「ルターにおける聖書と教会—真理、信仰、実存をめぐって—」

(キエルケゴール協会、シンポジウム「ルター、キルケゴール、カール・バルトにおける聖書と教会」 2018年7月1日)

3, 4, 5については、そこでの発表にもとづいた論文を、雑誌、図書などに投稿済であるが、未刊行であるのでここには記載しない。